

【2020年度調査実習報告（教員）】

# 1950年代長崎県によるキリシタン関連遺産の巡礼構想

## ——現平戸市域を中心に——

大平 晃久（人文社会科学域（教育学系）教員）

### I はじめに

巡礼とは、「聖なるものが顕現する特別な場『聖地』に赴き、祈りを捧げる行為」である<sup>1)</sup>。四国遍路、お伊勢参り、サンティアゴ巡礼（スペイン）などが特によく知られている。

巡礼については、観光と切り離せない存在であることがしばしば議論されてきた。スミスは、純粋な巡礼と純粋なツーリズムを両端とするその間に宗教ツーリズムは位置すると定義している<sup>2)</sup>。江戸時代のお伊勢参りなど、寺社参詣と観光が切り離しがたく結びついていたことはよく紹介されてきた。また、近年隆盛をみせる、四国遍路やサンティアゴ巡礼などについて、世俗的な楽しみが主か、スピリチュアルな欲求が大きいか、といった違いはあれ、敬虔な巡礼者（信仰者）だけで構成されているわけでないことは論をまたない<sup>3)</sup>。

長崎県においては、2000年代以降、キリスト教会などの「巡礼」を標榜した観光振興の取り組みが活発で、その過程が松井、山中、木村らによって紹介され、考察されてきた<sup>4)</sup>。すなわち、長崎県観光連盟は2003年に教会巡りのモデルコースを提示する「長崎・新キリシタン紀行」というプロモーションを開始し、2005年にはカトリック長崎大司教区監修による『長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド』が刊行された。2007年に、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」が世界文化遺産の暫定リストに入ってから、巡礼の観光資源化がさらに強まり、長崎県観光連盟はカトリック長崎大司教区との連携の元に『ながさき巡礼』キャンペーンを2007年から開始し、大司教区も長崎巡礼センターを2007年に設置、公式ガイドブックとして『ザビエルと歩くながさき巡礼』を2008年に刊行した。長崎巡礼センターでは2013年からサンティアゴ巡礼に範をとった「五島巡礼手帳」の取り組みも行っている。さらに、2021年からは、長崎県によって新しい巡礼コース「世界遺産巡礼の道」が設定されるに至っている。

このように、長崎県では、2018年の「長崎と天草の潜伏キリシタン関連遺産」世界文化遺産登録をはさんで、注目される動きが続いている。そのなかでは、当初は避けられていたかのようにみえる「巡礼」という用語が多用されるようになったことも指摘できよう<sup>5)</sup>。

しかし、長崎県において、「巡礼」の観光資源化はもっと早い時期に起こっていた。本稿は、様々な働く社会的な力のなかで進行する観光資源化・文化遺産化の一事例研究、観光史の一事例研究として、1950年代に長崎県で主に行政によって構想された、巡礼を含むキリシタン関連遺産顕彰を取り上げる。この遺産顕彰の取り組み、また巡礼コースは、ガイドブックとして出版された『長崎の殉教者』（1957年）で紹介されている。ただし、この取り組みが構想されたプロセスや、取り組み全体についてはこれまで明らかにされてこなかった。

以下ではまず、長崎県における1957年のキリシタン関連遺産顕彰構想の全体像を、この構想が1952年、1954年に散発的に報じられた構想から続く一連のものであることを含めて、網羅的に収集

してきた新聞記事を主に利用して明らかにする。次に、現平戸市域の事例からこの構想の特徴・問題点をみだし、この当時にキリシタン遺産に向けられていたまなざしの一端を明らかにしたい。

## II 長崎県による巡礼コース設定

(1) 1952年・54年の動き 『長崎の殉教者』は、長崎県によるキリシタン関連遺産顕彰の取り組みの一環として、1957年5月に出版された。県による出版企画であることは、「まえがき」にも、また当時の長崎県知事、西岡竹次郎<sup>にしおかたけじろう</sup>の筆になる「あとがき」にも明記されている<sup>6)</sup>。ただし、この取り組みは、1954年、さらに1952年までさかのぼるものである。その経緯をまずは追ってみたい。

1952年6月9日付『長崎民友新聞』に、「聖地巡禮 カトリック教徒の熱願」と題する社告が掲載された(図1)。そのなかでは、カトリック界との協力による「聖地巡礼」コース設定の企画が、次のように示されている。

…わが民友新聞社では、かねてカトリック教徒の熱願に應えて長崎教区の協賛を乞い、長崎を中心とした五島、平戸、天草などの「聖蹟めぐり」を企画中であつたが、今回、切支丹哀史の一頁をかざる「じゃがたらお春の碑」建立のため来崎した歌聖吉井勇氏の情熱的な慇懃や大野新九州主幹の進言もあり、この画期的な「聖地巡礼」を発表、全国のカトリック教徒に呼びかけて長崎を名実ともに全国的カトリック教徒のエレサレム<sup>(ママ)</sup>たらしめ、ローマたらしめたい念願であります。時期、コースなどの具体案については山口司教さまはじめ長崎教区の方々の御希望をきいて決める豫定であります。

この「聖地巡礼」は佛教徒間に四國四十八カ所、西國三十三カ所があるように、長崎を中心として、五島、平戸、天草にかけて散在している聖跡をとりあげて西洋流に十二カ所とするか、二十四カ所とするか、あるいは二十六聖人にちなんで二十六カ所とするか、一般カトリック教徒の御意見も承り長崎教区との間に取り決めたいと思います。

長崎民友新聞は、上述した西岡長崎県知事が1924年に創業し、1951年の知事就任直前にも社長を務めていた新聞社である。紙面に知事が登場する機会は多く、知事自身の寄稿もしばしば掲載された。そのため、一新聞社の企画ではあるが、後の長崎県による取り組みと何らかの連続性があるとみることができよう。

この企画は、カトリック長崎教区と連携したためであろう、明確に「巡礼」という表現を用いている。熊本県天草も対象としている点で、後継の企画と違うことも注目されよう。長崎県においては、1949年ザビエル400年祭で多くの海外からの誘客をもくろんでいたのが不振に終わっており、それに続くカトリックとの連携による観光振興とみることができるかもしれない。また、長崎民友新聞にとっては、この企画は同社主催の「長崎復興平和博覧会」<sup>7)</sup>の会

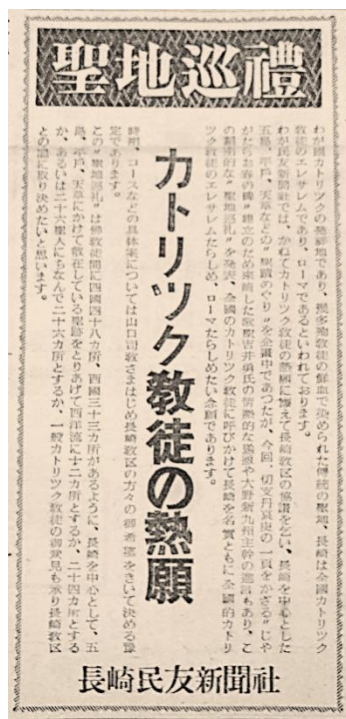


図1 聖地巡礼企画の社告

『長崎民友新聞』1952年6月9日付。

期末に打ち出した、次なるメディアイベントである。

ただし、この「聖地巡礼」企画のその後の進展は、管見の限りみいだせない。この時期の長崎民友新聞は、日本航空もく星号墜落事故における大誤報<sup>8)</sup>（4月10日）、長崎復興平和博覧会における県補助金の県議会での追及などで揺れており、「聖地巡礼」に取り組む余裕は失われていたのだろうか。

新聞報道から確認できる、この次のキリシタン関連遺産顕彰の取り組みは、1954年10月のことである。『長崎民友新聞』紙面（図2）をみると、「縣では雲仙、西海の両国立公園をもつ観光長崎縣を全世界に紹介、キリシタン発祥地として埋もれたキリシタン聖地を顕揚するため、西国八十八靈場の向うをはつて縣下にキリシタン聖地巡礼コースを設けることになった」<sup>9)</sup>と、観光との関わりが強調されているものの、2年前の自紙の企画のことは触れられていない。なお、朝日新聞の報道では、「聖地48カ所を選定」と巡礼地の数が明記されている<sup>10)</sup>。

西海国立公園指定が1954年8月23日に決定し（1955年3月16日官報告示）、9月26日には雲仙温泉にキリシタン殉教碑が建立されるなかでの企画の再浮上であった。10月1日付で県から各市町村に対して「巡礼候補地」を10月20日までに報告するよう求めており<sup>11)</sup>、後述の通り、北松地区（平戸市を含む北松浦郡）については市町村からの回答も報道されているが、そのほかの地区についてはどのような回答があったか明らかではない。また、新聞での続報も管見の限りみあたらず、何らかの進展があったかどうか不明である。

(2) 1957年の動き 長崎県によるキリシタン関連遺産顕彰が再び動いたのが1957年1月のことであった。『長崎民友新聞』の「西岡知事新春の抱負」という連載記事のなかで、知事は「県下のキリシタン史跡48カ所を整備。聖地「長崎」を顕彰すると共に、殉教者の靈魂を慰めるべく、計画いたしておる。今春にでも、天草四郎その他、殉難者の追悼会を営みたい。原城跡において、また記念碑を建立したい」と述べている<sup>12)</sup>。また、3月5日の県議会でも「議案説明」のなかで知事は同様のことを述べている<sup>13)</sup>。それに先立つ新聞報道（図3）は次のようなものであった<sup>14)</sup>。



図2 1954年の巡礼企画の報道  
『長崎民友新聞』1954年10月2日付。



図3 1957年のキリシタン史跡顕彰計画の報道  
『長崎民友新聞』1957年3月3日付。

県では県下の各地に散在するキリシタン遺跡を整備するため長崎、島原、平戸、佐世保の代表者や各地の宗教関係者が長崎に集つて二日午前十時から県内のキリシタン遺跡への顕彰について打合せた結果四月ごろキリシタン遺跡顕彰会（仮称）を組織して本県独特のキリシタン史跡の大きかりな整備と啓蒙に乗り出すことになった。

記事には、1957年が島原・天草一揆320年、二十六聖人殉教360年にあたることが示され、巡礼コースの設定のほか、原城跡記念碑と二十六聖人記念碑の建立、図書の出版が計画されていることも述べられている。4月16日に正式に発足した長崎県キリシタン史跡顕彰会は、知事を会長に、副知事、県観光貿易課長、県文書広報課長、県立図書館長やカトリック長崎司教、郷土史家らで構成されていた<sup>15)</sup>。行政が主導する組織であるが、カトリック界との連携によって宗教性の維持も意識されていたことがわかる。

「キリシタン史跡」すなわち巡礼地については、1957年3月3日付『長崎日日新聞』と『長崎民友新聞』（同内容）、『長崎の殉教者』に巡礼コースまで含めて報道され（図3・図4）、また4月16日の会合の結果を報じる4月17日付『長崎民友新聞』記事（図5）にも決定した巡礼地のリストのみが含まれていた<sup>16)</sup>。3月3日付記事と『長崎の殉教者』の巡礼地はほとんど同じであるが、前者で「東

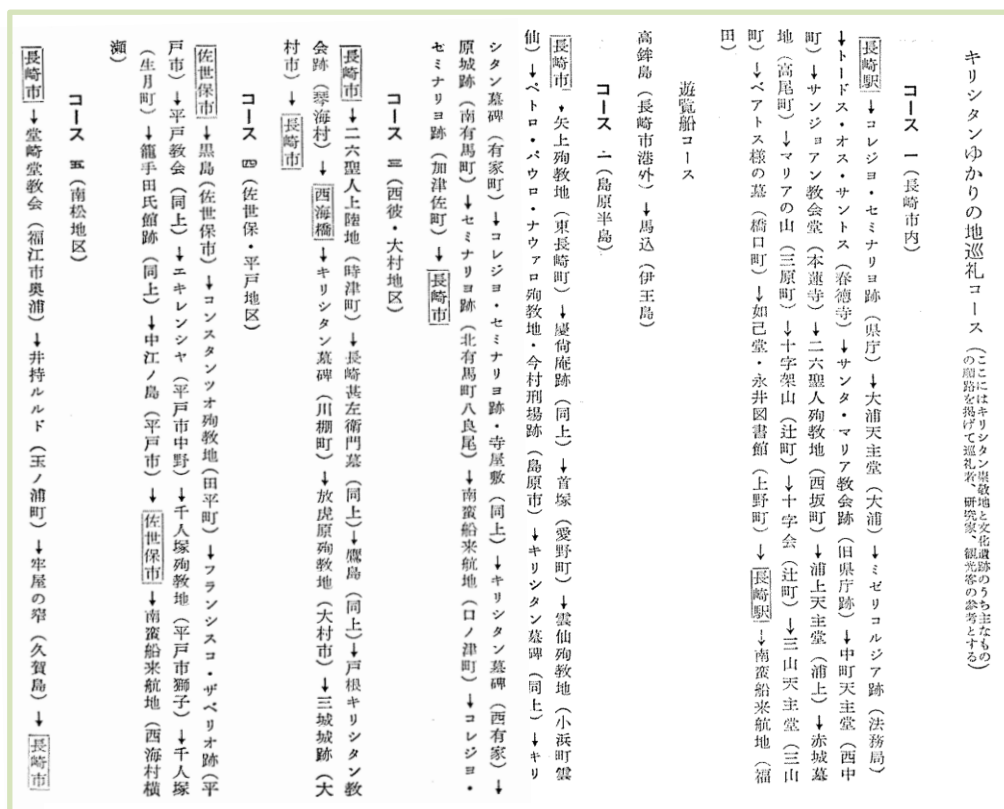


図4 『長崎の殉教者』掲載の巡礼コース

片岡弥吉『長崎の殉教者』角川書店、1957。

表1 巡礼（候補）地の比較

	『長崎日日新聞』1954年11月14日付記事（現平戸市内のみ）	『長崎民友新聞』1957年3月3日付記事	『長崎民友新聞』1957年4月17日付記事
現平戸市内	<p>フランシスコ・ザベリオ記念碑</p> <p>カトリック教会（天門寺跡） 焼罪（ヤイザ）コンスタンツオ</p> <p>不漁院跡 中江ノ島</p> <p>千人塚【生月】 黒瀬の辻のガスバル様 幸四郎山聖地 アントニオ聖地 焼山聖地 ダンジク様 お屋敷山 松崎のアントニオ様</p>	<p>フランシスコ・ザベリオ跡 平戸教会</p> <p>コンスタンツオ殉教地 エキレンシヤ 千人塚殉教地【根獅子】</p> <p>中ノ江島（ママ） 籠手田氏館跡 千人塚</p>	<p>フランシスコ・ザベリオ記念碑 カトリック教会</p> <p>焼罪</p> <p>ウンヤキ様（ママ）</p> <p>中江の島 館浦 千人塚 黒瀬殉教地（ママ）</p>
長崎市内（当時）		<p>コレジヨ・セミナリオ跡【旧県庁】</p> <p>二十六聖人殉教地 ベアトス様の墓 トードス・サントス ミゼクコルデア（ママ） サンジョアン教会堂【本蓮寺】 サンタ・マリア教会跡【立山】</p> <p>十字架山 大浦天主堂 中町天主堂 浦上天主堂 三山天主堂 十字会 マリアの山 如己堂 高銚島 赤城墓地</p>	<p>コレジヨ跡</p> <p>二十六聖人殉教地 ベアトス様の墓 コレジヨ・セミナリオ跡 ミゼルコルデア跡 ザンジョアン教会跡 サンタマリア教会跡</p> <p>十字架山 大浦天主堂 西中町天主堂 浦上天主堂 三山天主堂 十字会 マリアの山 如己堂 高銚島 赤城墓地 大山天主堂 南蛮船来航の地【福田】</p>
島原半島周辺		<p>東望浜殉教地【長崎市矢上】</p> <p>慶尚庵跡【長崎市古賀】 首塚【雲仙市愛野】 雲仙殉教地 ペトロ・ナバロ殉教地【島原市】 キリシタン墓碑【島原市】 キリシタン墓碑【南島原市有家】 コレジヨ・セミナリオ跡【南島原市有家】 キリシタン墓碑【南島原市西有家】 セミナリオ跡【南島原市北有馬】</p> <p>原城跡 南蛮船来航地【南島原市口之津】 コレジヨ・セミナリオ跡【南島原市加津佐】</p>	<p>矢上殉教の跡【長崎市矢上】 キリシタン教会跡</p> <p>キリシタン殉教地 キリシタン墓碑 キリシタン墓碑 コレジヨ・セミナリオ跡 キリシタン墓碑 セミナリオ跡</p> <p>原城跡 南蛮船来航の地 コレジヨ・セミナリオ跡 首塚【南島原市有家】</p>
その他		<p>馬込【長崎市伊王島】 戸根キリシタン教会跡【長崎市琴海】 二六聖人上陸地【時津町】 長崎甚左衛門墓【時津町】 鷹島【時津町】 南蛮船来航地【西海市横瀬】 キリシタン墓碑【川棚町】 黒島【佐世保市】 三城城跡【大村市】 放虎原殉教地【大村市】 井持ルルド【五島市】 牢屋の窄【五島市】 堂崎堂教会（ママ）【五島市】</p>	<p>馬込教会 キリシタン教会跡 二十六聖人上陸の地 長崎甚左衛門の墓 高島（ママ） 南蛮船来航の地 キリシタン墓碑 黒島 三城城跡 放虎原 井持ルルド 牢屋の窄 堂崎天主堂</p>

表記は異なっても対応する場所を横に並べた。また、「その他」の地域、区別がつきにくいもの、あまり知られていないもののみ、【五島市】のように現在の地名を注記した。なお、「ウンヤキ様」（現平戸市内）は「ウシヤキ様」の誤りで、現在は「ウシワキの森」あるいは「おろくにんさま」とよばれることが多い。





図5 キリシタン史跡顕彰会の報道  
『長崎民友新聞』1957年4月17日付。

望浜殉教地」であった部分が後者では「矢上殉教地」になり、前者になかった「南蛮船来航地（福田）」が後者には追加されている。この内容は4月17日付記事にも共通していることから、3月3日版巡礼コースを一部修正したのが『長崎の殉教者』版で、さらに修正して4月17日版になったと判断できる。

3月3日付各紙と、4月17日付『長崎民友新聞』でそれぞれ報じられた巡礼地を表1に示した。これをみると、51か所あるいは52か所の巡礼地には現在でも知名度の低いものが多く含まれ、旧長崎市内と島原半島に6割が集中している。ここは戦前からの観光ルート上であり、他のコースも実際にたどるには相当な困難を伴っただろうが、ある程度は当時の交通路線に基づいているといえるかもしれない。ただし、現在、多くのキリシタン関連遺産があることで知られる上五島（新上五島町）や外海（長崎市）からは1か所も選ばれていない。後述するよ

うに、現平戸市域についても、今日注目される遺産が多数抜け落ちている。また、4月17日版の巡礼地には、3月3日版にはあった「雲仙殉教地」と「首塚（愛野町）」がみられず、代わりに「首塚（有家町）」が入っている。しかし、旧有家町、現南島原市有家にはキリシタン関係の首塚として知られた場所はない一方、高い知名度をもち、記念碑も建立されていた「雲仙殉教地」があえて外されることも考えにくい。この変更は過誤であると思われる。なお、永井隆博士が療養した「如己堂」が「キリシタン史跡」に加えられていることには違和感もあるが、ここは潜伏キリシタン時代の帳方屋敷跡でもあった。

1957年4月16日の長崎県キリシタン史跡顕彰会発足は新聞各紙で報じられた。県からは「キリシタン史跡」を有する県内市町村あてにその後も働きかけが行われている<sup>17)</sup>。しかし、それ以外で、その後の報道や県議会での発言は管見の限りみいだせない。5月1日の西岡知事による佐藤勝也副知事解任とその後の県議会での紛糾、7月25日の諫早大水害、そして、9月9日の知事入院、翌1958年1月14日の知事死去（3月3日佐藤知事が就任）という日程のなかでは、キリシタン関連遺産の顕彰が進展するはずもなかったであろう。

さて、ここまで、1952年の長崎民友新聞による企画を端緒とし、1954年と57年には長崎県によって、キリシタン関連遺産の顕彰が手掛けられたことを確認してきた。個々の遺産の大半は、巡礼（候補）地として発表されるのみで、解説板が建てられたかどうかは定かではない。とはいえ、1957年5月には西岡知事の撰文による原城跡顕彰碑が建立され、同じく5月にはガイドブック『長崎の殉教者』も出版された。1962年までずれ込んだとはいえ日本二十六聖人記念碑も実現している。巡礼コースの整備を除けば、当初の計画はほぼ実現したということもできるかもしれない。

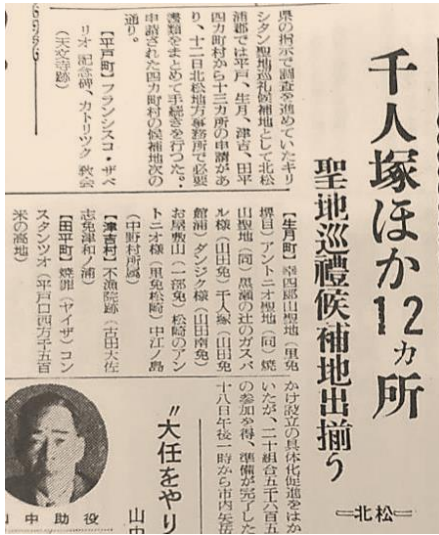


図6 現平戸市域の巡礼候補地の報道  
『長崎日日新聞』1954年11月14日付。



図7 現平戸市域の巡礼(候補)地  
○が1957年4月17日最終案, ただし誤字は訂正。その他の主要な候補地を●で示した。

### III 平戸の巡礼地

(1) 巡礼候補地の変遷 現平戸市域の巡礼(候補)地は、図4に示したように佐世保発着の「コース四」に含まれている。平戸島中部(千人塚殉教地・ウシヤキ様)から生月島へ渡るというルートは今でこそ自然だが、当時は定期航路を利用するとすれば平戸島東部の薄香港<sup>うすか</sup>まで戻る必要があり、相当な時間を要しそうである。

前章でみたように、1954年に長崎県は市町村に対して「巡礼候補地」リストの提出を求めた。現平戸市域については、その「巡礼候補地」を新聞報道によって知ることができる。その記事(『長崎日日新聞』1954年11月14日付、図6)によれば、候補地を県に対して提出したのは平戸町、生月町、津吉村、田平村の4町村(いずれも現平戸市域)で、ウシワキの森(おろくにんさま)などの潜伏キリシタン遺産や世界遺産構成資産春日集落を含む獅子村<sup>ししむら</sup>(現平戸市)からは提出されていない。なお、これら1954年の「巡礼候補地」のうち、「不漁院跡」(津吉村)、「松崎のアントニオ様」(生月町)は、今日では全く忘却され、その位置すら知られていない<sup>18)</sup>。

さて、表1に示された現平戸市域の巡礼(候補)地をみてすぐに気づくのは、1990年代以降に「巡礼」の主要な対象になったローカルな教会が取り上げられていないということである。表2には、現平戸市域におけるバチカン公式巡礼地、世界遺産構成資産候補、キリスト教関連の指定・選定文化財を示した。ここにあげられたどの教会も巡礼(候補)地には含まれておらず、その代わりに、次節で取り上げる「平戸教会」が唯一の現役の教会として巡礼地になっていたことがわかる。なお、ローカルな教会が巡礼地に入っていないのは、上述したように外海や五島などでも同様である<sup>19)</sup>。

一方で、のちにバチカン公式巡礼地となった2か所の殉教地は、最終的には巡礼地に含まれている。このうちの「焼罪」は、ここで殉教したカミロ・コンスタンツォ神父が1867年に列福されていたためか、戦前から地誌書にも取り上げられる場所であった<sup>20)</sup>。1958年には殉教碑が建立されており(図

表2 現平戸市域のキリシタン関連遺産の公的な位置づけ

バチカン公式巡礼地	世界遺産構成資産候補	文化財（指定・選定年）
焼罪公園（カミロ・コンスタンツォ神父殉教碑） 黒瀬の辻殉教地	（2007年暫定リスト記載時） 田平天主堂 宝亀教会  （2009年1月追加） 生月・平戸の文化的景観 中江ノ島  （最終候補・登録） 平戸の聖地と集落（春日集落と安満岳） 平戸の聖地と集落（中江ノ島）	【平戸市指定史跡】 焼罪（1968年、旧田平町） 殉教地・一部氏屋敷跡（1971年、旧生月町） 殉教地・焼山（同上） 殉教地・ガスパル様（同上） 殉教地・千人塚（同上） 殉教地・ダンジク様（同上） ウシワキの森（2015年） 【長崎県指定文化財】 宝亀教会（2003年） 紐差教会（2010年） 【国指定重要文化財】 田平天主堂（2003年） 【国選定重要文化的景観】 平戸島の文化的景観（2010年）

バチカン公式巡礼地は次の文献による。木村勝彦「宗教ツーリズムにおける真正性と倫理の問題：長崎のキリスト教聖地をめぐって」（山中弘編『宗教とツーリズム：聖なるものの変容と持続』世界思想社，2012）267・268頁。なお，登録文化財は該当なし。



図8 焼罪殉教碑

『長崎民友新聞』1958年9月16日付。



図9 平戸教会と仏教寺院群

2020年撮影。

8) <sup>21)</sup>，ほとんどが何の整備もされなかった巡礼地のなかで，この時期に大きく変貌を遂げた事例として特筆される<sup>22)</sup>。

現平戸市域にはいくつかの巡礼候補地があり，その点では全く巡礼候補地のない上五島や外海とは異なる。しかし，1954年に地元から推薦された巡礼候補地と，1957年に外部の顕彰会が選定した巡礼候補地には明らかな違いもみられる。そのことを軸に，以下では現平戸市域の巡礼（候補）地について，どのような特徴があるか考えてみたい。

(2) 観光への配慮 まず注目したいのは，「平戸教会」と「エキレンシヤ」が巡礼（候補）地として取り上げられていることである。これらは当時から観光地としての性質を有する場所であった。

細かくみていくと，1954年の案では「カトリック教会（天門寺跡）」として，南蛮貿易期の教会跡地が巡礼候補地とされていたのが，1957年には現在の平戸教会が巡礼地とされた。これが，現在ではより注目されている他の教会を差し置いてのことであったことは上で指摘した。平戸教会は1908年に初めて設けられたもので，巡礼地として名前があがった他の教会と比べてやや歴史は浅く<sup>23)</sup>，また「キリシタン史跡」とはよびがたい。また，当時はザビエルを記念する教会でもなかった。



平戸教会はこの当時すでに観光の文脈で語られる存在であった。例えば、このころの平戸を紹介する冊子のなかでは、「平戸に遊び、平戸の港から船に乗って出て行く人は、教会の十字架を望み、松浦邸の帯のような白壁を眺め、オランダ商館の趾と、亀岡城趾を顧みて、一抹の哀愁にとりつかれる」と描写され<sup>24)</sup>、平戸の名所を写真で紹介する新聞連載記事では、平戸教会の塔と仏教寺院が並ぶ景観が「平戸の歴史を象徴する教会と寺へゆく坂道」として紹介されている<sup>25)</sup>。

一方のエキレンシヤは、現平戸市川内のキリスト教会跡とされる場所である<sup>26)</sup>。川内は戦前から鄭成功ゆかりの地、また平戸の副港としてポルトガルやオランダの商人が行きかかった地として知られ、早くから観光ガイドブックにも取り上げられていた<sup>27)</sup>。エキレンシヤはそのなかで一定の注意を引いてきたといえる。エキレンシヤは現在では全く知られておらず、また、管見の限り、宗教的な文脈でこれまで語られることもなかった。

平戸教会、エキレンシヤには巡礼（候補）地として違和感があり、それらをあえて巡礼（候補）地としたことには観光への配慮を感じざるを得ない。上述したように、新聞報道では観光への期待が強く示されていること、長崎から島原半島への観光コース上に巡礼（候補）地の約6割があることなども含めて<sup>28)</sup>、このキリシタン遺産顕彰の企画全体に観光の影響をみることができるよう。

(3) 生月島、あるいは県縁辺部の扱い 次に注目したいのは、上でみたこととも関わるが、1954年に生月町から提出されていた巡礼候補地の大半は1957年の案からは外されるとともに、生月島内のキリシタン関連遺産について混乱がみられる点である。

今日、生月は世界遺産からは除かれているものの、潜伏キリシタン関係遺産が多数あることで知られている。表2に示した多数の平戸市指定史跡はそのことを物語っている。しかし、1957年の巡礼地選考過程では、その多くは取り上げられず、のちにバチカン公式巡礼地となる「黒瀬の辻殉教地」（図10）すら、最終的には巡礼地として復活してはいるが、一時は除外されてしまっていた。

また、巡礼地として「館浦」と「千人塚」が決定しているが、「千人塚」は館浦集落の中心にあり、重複していること、一時巡礼候補地としてあげられた「籠手田氏館」も館浦集落にあったが<sup>29)</sup>、ここは潜伏キリシタンとの関係ではほとんど注目されたことがなく、巡礼地として不相当であることは、「混乱」と評するほかない。キリスト教伝来のころに館浦を支配した籠手田安経の弟に生月島北部の壱部浦を支配した一部勘解由がおり、2人はともにキリスト教に入信した。一部勘解由の屋敷跡と伝



図10 黒瀬の辻（ガスパール様）

1992年にカトリック側によって隣接地に殉教碑も建てられている。2021年撮影。



図11 お屋敷山（一部氏館跡）

カクレキリシタンの御堂は取壊され、祠と信仰用具の収納庫がある。2020年撮影。

わる場所は神聖視され、1954年の巡礼候補地には「お屋敷山」(図11)として含まれており、あるいはこちらを巡礼候補地にしたかったのかもしれない。1957年当時、生月島の潜伏キリシタンとその聖地は、田北による研究<sup>30)</sup>などによってすでに知られた存在であった。『長崎の殉教者』にも生月の殉教地は詳しく紹介されている。それにも関わらず、このように適切とはいいがたい巡礼地の決定が行われたのだった。

このように、生月は巡礼コースに含まれたものの、巡礼(候補)地選定過程では混乱がみられ、生月島のキリシタン関連遺産の情報や知識が不足していたことは明らかである。そして、こうした状況はここまでもみたように外海や上五島についても同じである。現在、世界遺産「潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産が多数所在する外海や上五島には、1か所の巡礼候補地もない。交通が不便な地ではあるが、不便さでは同等かそれ以上の黒島(佐世保市)や牢屋の峯(五島市久賀島)が選ばれていることをみると、アクセスの困難さは決定的な要因とはいいがたい。長崎県縁辺部のキリシタン関連遺産の大半が忘れ去られたような状況であることがわかる。上述した、現平戸市域の教会で巡礼地になったのは平戸教会のみであるのに対し、長崎市内(当時)だけで5か所の教会が選ばれていること(表1、図4)も、その一環として理解できよう。

では、そこに、生月島・平戸島や、外海、上五島に当時はまだ少なくなかった、カクレキリシタンへの否定的な発想があったのだろうか。巡礼候補地の選定側にカトリック関係者は入っているが、外海の出津教会や上五島の青砂ヶ浦<sup>あおさがうら</sup>天主堂のように、教会が行った社会事業や鉄川与助の手になる教会建築が今日では有名な事例すらも無視されている。そのことをみれば、カクレキリシタンの存在に関わりなく、当時のキリシタン関連遺産に対するまなざしの射程から、長崎県の縁辺部がはみ出していることがうかがえる。今日とは異なる、キリシタン関連遺産に対する見方が読み取れるのではないか。

#### IV おわりに

本稿は、観光資源化・文化遺産化、または観光史の一事例研究として、これまであまり知られていなかった1950年代における長崎県内のキリシタン関連遺産顕彰構想を取り上げた。そして、この構想が、1952年の長崎民友新聞社の企画から1954年・1957年の長崎県による施策へと続く一連のものであることを明らかにした。当初からカトリック界との連携が図られていたために「巡礼」という用語が使われたと推測される。また、現平戸市域について1954年と1957年の巡礼(候補)地を検討し、そこからこの構想の特徴・問題点を考察した。平戸教会堂や川内エキレンシヤといった観光地としての性格を有する場所が巡礼(候補)地に含められていくことなどに観光への配慮が読み取れる。その一方で、生月島の巡礼(候補)地選定には混乱があり、キリシタン関連遺産に関する情報や知識が不足していたと考えられ、さらに、今日とは異なり、外海や上五島などを含む長崎県縁辺部のキリシタン関連遺産の大半が注目されていないことも示唆される。

本稿で扱った時期の「巡礼」はむしろ現在にそのままつながるものではない。キリシタン遺産の宗教性を維持した観光資源化としての連続性はあるが、現在とはキリシタン関連遺産に対するまなざしが異なることも示された。観光資源化・文化遺産化がいかに進むか考えるうえで、長崎のキリシタン関連遺産は未だ興味深い事例であるといえる。

【付記】今里悟之氏（現・名古屋大学）には平戸のキリシタン関連遺産についてご教示いただいた。記して感謝申し上げる。なお本稿の内容は2021年人文地理学会大会（2021年11月21日、オンライン）で発表した。

## 注

- 1) 浅川泰宏「巡礼」（星野秀紀ほか編『宗教学事典』丸善出版、2010）472頁。
- 2) Smith, V.L. 'Introduction: The Quest in Guest', *Annals of Tourism Research*, 19(1), 1992, pp.1-17.
- 3) 星野英紀・山中弘・岡本亮輔編『聖地巡礼ツーリズム』弘文堂、2012に取り上げられた諸事例など。なおサンティアゴ巡礼については、12世紀『サンティアゴ巡礼案内』、15世紀『サンティアゴ巡礼記』で早くも観光的要素（都市景観や特産物、各地の風俗と言語、施療院での食事・宿泊サービス、各地の流通貨幣と両替時の心得、巡礼路都市間の距離）の記述があるという。関哲行「サンティアゴ巡礼」（四国遍路と世界の巡礼研究会『四国遍路と世界の巡礼』法蔵館、2007）199-210頁。
- 4) 山中弘「長崎カトリック教会群とツーリズム」哲学・思想論集（筑波大学）33、2007、176-155頁、木村勝彦「長崎におけるカトリック教会巡礼とツーリズム」長崎国際大学論叢 7、2007、123-133頁、松井圭介『観光戦略としての宗教—長崎の教会群と場所の商品化』筑波大学出版会、2013、松井圭介「長崎の教会群と宗教ツーリズム」歴史地理学57-1、2015、88-103頁。
- 5) 島原における「島原半島天草諸島巡礼マップ」（2013年）、大村の「キリシタン巡礼マップ」（2015年）など。一方、平戸は2003年以来「平戸キリシタン紀行」のままである。
- 6) 片岡弥吉『長崎の殉教者』角川書店、1957、5・196頁。
- 7) 現在の長崎平和公園を会場に、1952年4月10日～6月18日の会期で開催された。詳細は拙稿「長崎平和公園の成立：場所の系譜の諸断片」長崎大学教育学部紀要 1、2015、15-28頁を参照。
- 8) 長崎復興平和博覧会出演のため同機に搭乗して死亡した、漫談家大辻司郎の生還談話を掲載した。
- 9) 「縣下にキリシタン巡禮コース 縣が全世界に紹介 原城跡など數十カ所」、『長崎民友新聞』1954年10月2日付。
- 10) 「聖地 48カ所を選定 県下キリシタン史跡中から」、『朝日新聞』（佐世保版）1954年10月3日付。
- 11) 「切支丹ゆかりの地を 県下市町村に調査依頼」、『長崎日日新聞』1954年10月2日付。
- 12) 「西岡知事新春の抱負 1 キリシタン聖地を顕彰 中島川水上公園も完成へ」、『長崎民友新聞』1957年1月11日付。
- 13) 昭和32年第1回定例会（3月5日～27日）。長崎県議会史編さん委員会編『長崎県議会史第七巻』長崎県議会、353頁。
- 14) 「世に出るキリシタン遺跡 県下の殉教地を整備 各地に巡礼コース 廿六聖人の碑など 四月ごろ顕彰会を組織」、『長崎民友新聞』1957年3月3日付。
- 15) 「埋れたキリシタン史跡を顕彰 原城跡など五十二 県キリシタン史跡顕彰会が発足」、『長崎民友新聞』1957年4月17日付。
- 16) 前掲15)。他紙でもコースの詳細は報じられていない。
- 17) 県から久賀島村（現五島市）に対して、史跡整備・顕彰計画の問い合わせや記念スタンプ配給予定の通知がなされているが、実際に配給されたかどうかは不明。おそらく他の「キリシタン史跡」を有する市町村に対しても同様であったと推測される。「浜脇教会の牧者たち」、<http://frsimoguchi.web.fc2.com/hama/shunin32.html>（2021年11月30日閲覧）。
- 18) 記事によれば、「不漁院跡」は旧津吉村古田大佐志免津和ノ浦に所在する。現在では人家から離れた海岸だが、大佐志は移住潜伏キリシタン集落であり、かつて礼拝を行っていたところであろうか。また、「松崎のアントニオ様」は「松崎のアントー様」として田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』などには言及されており、現在の平戸市役所生月支所付近であろう。「堺目のアントー様」（表1の「アントニオ聖地」）に葬られたアントニオが殺害された場所であると思われる。田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン（第3版）』国書刊行会、1978（初版1954）、ページなし（第122図）。
- 19) 世界文化遺産登録を目指していた「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の構成資産候補数が最多であった2009年1月時点における長崎県内の候補で、表1の巡礼地に全く含まれていない教会（遺構などを含む）は、現平戸市域以外では次の通り。出津教会、大野教会（以上、長崎市外海地区）、青砂ヶ浦天主堂、頭ヶ島天主堂、大曾教会（以上、新上五島町）、旧野首教会（小値賀町）、江上天主堂、旧五輪教会（以上、五島市）、サント・ドミンゴ教会跡（長崎市）。
- 20) 平戸尋常高等小学校編『平戸郷土誌』平戸尋常高等小学校、1917、194頁。
- 21) 「カミロ神父の殉教碑 21日に除幕式 田平のヤイザ跡に建立」、『長崎民友新聞』1958年9月16日付。なお、この碑は1990年に建て替えられている。「カミロ神父の遺徳しのび 「焼罪の碑」が完成 田平」、『長崎新聞』1990年3月28日付。
- 22) この他に牢屋の窄（五島市）でも、1957年が殉教90年にあたることから8月23日に式典が執り行われ、解

- 説板が建てられている。前掲 17)。
- 23) 設立当初は上神崎教会の巡回教会であった。現教会堂は 1931 年完成。なお、巡礼（候補）地の他の教会で平戸の次に新しいのは、井持浦教会（五島市，1897 年）であるが、ここは日本最古（1899 年）のルルドを有する。また、長崎市外で巡礼（候補）地とされた（実質的に教会がメインであると考えられる場合も含む）教会は、平戸を除き、いずれも潜伏キリシタン時代につながる由緒をもつ。
- 24) 矢動丸廣『平戸史話』親和銀行，1954，208 頁。
- 25) 「平戸ところどころ 5」、『朝日新聞』（佐世保版）1953 年 9 月 11 日付。
- 26) 埴薫蔵『平戸史蹟大観』愛宕山荘，1934，139 頁。
- 27) 日本交通公社『(旅行叢書第 10 集)九州地方（4 版）』日本交通公社，1953，120-121 頁。現平戸市域の項目は「平戸町」「平戸和蘭商館址」「千里ガ浜」のみで、川内は「千里ガ浜」の項で説明されている。
- 28) 図 4 の「巡礼コース三」は大村湾をわざわざ一周する一見変わったコースであるが、西海橋を渡らせていることに注目したい。1955 年 12 月に通行が開始されたこの橋は、当時「東洋一」と称されたアーチ橋で、重要な観光資源でもあった。
- 29) 次の資料には「殿山城」と表記され、城内にカトリック教会があった可能性にも触れられている。ただし、現在は生月観音の建つ城跡がキリシタン関連遺産として言及された例は、管見の限りない。長崎県教育委員会『(長崎県文化財調査報告書 206)長崎県中近世城館跡分布調査報告書 1』長崎県教育委員会，2010，25 頁。
- 30) 前掲 18)。